

# 地域と連携した防災教育（木頭小）

## 1 はじめに

### （1） 本校の概要

本校は、阿南市より那賀川を約80キロさかのぼった山間僻地に位置し、那賀川源流まで車で約1時間程で行くことができる。校区は、那賀川の両岸に沿って東西に細長く広がっている。児童数は、37名の小規模校であるが、校区が広いためにスクールバスで通学している児童が3名いる。子ども達は純粹素朴で、自然環境に恵まれたなかで学年の分け隔てなく仲良く遊ぶ姿がよく見られる。スポーツ少年団活動も盛んで、少年剣道では2年続いて徳島県の代表として全国大会に出場している。

しかし、一見自然豊かでのどかに感じられる本地域も、那賀町木沢や上那賀地区での台風による被害は記憶に新しいように、自然災害を受けやすい一面も持っており、防災教育を推進していく必要性を強く感じている。

### （2） 事業の概要

徳島県教育委員会より「平成18年度防災教育推進モデル校」の指定を受け、一人ひとりの実践的防災対応能力の向上を図るとともに、地域と連携した防災ボランティア活動の実践力の育成に取り組んできた。地域の防災力を高めるためには、日頃からの地域住民同士の関係づくりが大切であると考えている。日常からの住民結束を基盤として、今年度の防災教育の具体的な目標を、次の3点に絞った。

- ① 火災や地震発生時における安全な行動の仕方や対処の方法について理解することができる。
- ② 災害発生時の状況やその変化について理解し、的確な判断の下、安全な行動ができる態度や能力を育てる。
- ③ 災害発生時及び事後に、進んで他の人々の安全に役立つ態度や能力を育てる。

## 2 具体的な取組み

### (1) 地域安全マップの作成とその見直し

昨年度末、集団下校時に、通学路の安全点検や危険箇所の確認をした。危険箇所では、全員が立ち止まり、どのように危険な箇所なのか確認し、高学年児童が地図にチェックし

ていった。各グループで調べてきたことは大きな地図に書き込み、全体の中で互いに発表し共通理解を図った。書き込みが終わった地域安全マップは、児童がいつも目にする階段に掲示し、危機意識が薄れないように配慮した。

本年度は、土石流災害指定区域等の地点を付け加えた。より山間地域にふさわしい安全マップにすると共に、日頃より災害を未然に防いでいこうとする意識の高揚・持続を図りたい。

11月中旬に1週間の調査期間を設け、学級活動や登下校時に危険箇所を探した。11月20日の朝会の中で、短い時間であったが発見した箇所を発表しあった。写真を見せながら発表するなど、学年に応じて意欲的に調べることができた。



## (2) 防災センターでの体験学習

6月17日(土)、遠足で北島町にある県立防災センターに全校児童で行った。日頃体験できない次のような体験ができた。

- ◆地震体験
- ◆風雨体験
- ◆煙体験
- ◆消火体験



## (3) 自助の精神を生かした避難訓練と避難 マニュアルの作成

### ア 第1回避難訓練

6月27日(火)、火災を想定した避難訓練を行った。これまでに行ってきた避難訓練とは少し違って、授業時間ではなく清掃時間に実施した。教師の指示ではなく、自分たちの判断で行動できるように意識をもたせることができた。

また、この訓練では、身近な物（竹馬と体操服）を使ってけが人を運ぶ方法を紹介をし、進んで他の人々に役立つ行動がとれるようなヒントを与えることができた。

## イ 避難マニュアルの作成

災害は、もちろん不意にやってくる。避難訓練で大切にすることは、大人の指示に従って避難するのではなく、「いかに自分で判断し、自分たちで助け合って避難できる力をつけるか」ということである。

避難マニュアルは、教師（大人）がそばにいる場合と、いない場合の2通りつくった。さらに、教室・特別教室・運動場という状況別に分けて、地震が起こった場合の対処の仕方を書き入れた。全児童に配布すると共に、各教室にも掲示し、常日頃から目に触れやすいようにした。

## (4) 地域の高齢者とのコミュニケーション作り

実際に災害が起こった時、共に助け合おうとするためには、互いのコミュニケーションがとれていることが最も大切になると言われている。

毎年、運動会には地域のお年寄りを招待しているが、今年度は、児童が直接お年寄りの家に訪問し、招待状を届けた。日頃から地域の人とのコミュニケーションを深めることが、もし災害が起きたときにも生かされると考えている。次に挙げる防災訓練でも、自主防災会や地域の方々に参加を呼びかけ、訓練の初期段階から話し合いを重ねて計画を練っていった。



## (5) 合同防災訓練

11月29日(水)、学校が位置する和無田地区自主防災会との合同防災訓練を行った。木頭中と木頭保育園の参加もあり、総勢194名の大がかりな訓練となった。これは、地域と連携した防災ボランティア活動の実践力の育成に重点をおいた本校の取組みのメイン事業となった。

### ① 訓練の目的

- 災害に対し、自分たちの力で乗り越えることのできる防災力のある子どもたち・保護者・地域となるよう、地震発生直後の集団避難訓練・初期消火活動などを連携して行う。

- 防災訓練の企画や運営を子どもたちが主体的に行うことにより、自分の命を守るために自分ができる防災を考える。
- 地域の防災力の一員であるという自覚のもとに、身近な人たちに何ができるか考える。

## ② 訓練の想定

午前9時45分、南海トラフを震源とするM8.1の地震が発生。那賀町木頭地区では震度5強。那賀町各地で家屋が倒壊し木頭地区に至る国道195号線も土砂崩れにより寸断。数カ所火災の発生も見られる。木頭小児童・木頭中生徒および和無田地区住民は、地震の第一波が収まった後、余震に備え木頭小運動場に避難。

## ③ 訓練の概要

### ア) 消火体験1 (バケツリレー)

プールから学校までの約100mを木頭小児童、木頭中生徒、そして地域の人がつながり、消火体験を行った。長い距離をリレーするためには、たくさんの人数が必要なことを実感できた。

### イ) 消火体験2 (粉末消火器)

丹生谷消防署の方の協力により、実際にオイルパンに火をつけ、高学年児童が粉末消火器で消火した。防災センターで水消火器を使った経験が生かされてか、わずかの説明を聞いただけで見事に消すことができた。体験しておくことの大切さがよく分かった。



### ウ) 救急救助体験

5・6年児童が総合的な学習の時間に、学んできた緊急時における救助の方法を実演を交えて紹介した。三角巾を利用した包帯の巻き方や手当の仕方、簡易担架の作り方など、学習の成果がよく表れた発表となった。最後には、丹生谷消防署の方からAEDによる救急法を指導していただき、中身のある内容になった。

## エ) 炊き出し試食サービス

和無田自主防災会の方々の協力で炊き出しを行った。メニューは、おにぎりと豚汁で、両方とも味は上々だった。出来上がったものは、児童生徒が中心となって地域の方の席までに配って歩いた。



## 合同防災訓練を終えて（6年 男子）

合同防災訓練では、やってみて分かったことがたくさんあった。バケツリレーでは、並ぶ時や準備をもっと早くできたらよかった。また、空になったバケツをもどす時にスムーズにできなかったのが改善したらいい。炊き出しでは、僕たちができることは少なかったけれど、本当に地震が起こった時は、ボランティアなどをして助け合いたいと思いました。知らないことがたくさん分かった訓練でした。

## （6）防災掲示板による啓発

児童・保護者の防災への意識を高めるために、防災掲示板を設置した。防災に関する写真を展示したり、資料の紹介をしたりした。

## 3 終わりに

南海地震は、近い将来必ず起こるであろうと言われている。明日起こっても不思議でない状況にあることは、誰もが承知のことである。しかしながら、では、その時に自分はどうか行動すべきか、周りに対して何ができるかと問われたら、即座に返答できないのが普通であろう。

今年度、防災教育に取り組んできて、少しずつ子どもたちの意識が高まりつつあることが目に見えるようになってきている。防災アンケートの結果からも、災害が起こったときに自分ができることに気づいた児童が増えていることが読みとれた。

自主防災会との合同防災訓練では、関係諸機関の協力を得て、緊張感のある訓練を行うことができ、地域住民の防災意識の向上につながった。事後の反省会でも、第1回の防災訓練を生かし、今後も連携を取り合って継続していくことを確認した。また、校内の危険

箇所を総合学習で調査し、部分的にはあるが耐震対策を施すことができた。

以上のような成果もあったが、今後の課題も見えてきた。

- (1) 5・6年の児童が、総合学習として防災学習の中心となって取り組んできたが、低学年児童の主体的な活動にはなっていなかったのではないか。全校児童が主体的に取り組めるような、系統性のある防災学習を展開する必要がある。
- (2) 高齢者を中心とした地域の住民の方の積極的な参加が見られたが、保護者の方々の参加が少なかった。学校の取り組みをより詳しく紹介し、啓発していくことに課題が残った。
- (3) 本年度は、地震災害中心の取り組みであったが、より多様で幅広い防災教育を推し進める必要がある。

以上のような点に留意しつつ、様々な取組みを計画的に継続して行っていくことで危機感を伴った防災意識をさらに高めていけると考えている。